

VI 丹沢大山の風景意識

杉浦高志¹⁾・糸長浩司²⁾

Scenery Consciousness of Tanzawa-Oyama

Takashi Sugiura & Koji Itonaga

要約

本稿は丹沢大山の山岳山麓の風景の有り様に関する研究である。丹沢大山地域の小学校校歌の歌詞分析から丹沢大山の山岳山麓風景を文学的視点から解釈する。さらに、丹沢大山を日頃から眺めている都市住民を含めた県民へのアンケート調査を実施し、丹沢大山の山岳山麓風景に対する思いや、その保全意識を明らかにした。結果、校歌歌詞分析では、山としては「大山」、「阿夫利」、「丹沢」、「富士山」がおおよまれ、大山から丹沢へ、丹沢から富士山へという奥行きのある山岳風景をうたっているものと、個々の山々をうたっているものがある。川としては、「相模川」、「中津川」が多くよまれ、「玉川」、「道志川」が次いでいる。アンケートからは、県民の丹沢大山の魅力は「四季の自然の移ろい」、「森林」等の視覚的魅力であり、都市近郊に近い多様な自然の存在が評価され、その風景の価値は、精神的なやすらぎの風景として評価されている。丹沢大山の風景の可視化度合いによって風景評価や保全行動意識への差が明らかになった。

1. はじめに

近年、景観法が制定され、景観を配慮した地域計画が益々重要となってきた。その景観の維持、保全の方策を探るためには、歴史的な風景のとらえ方や、現在の多様な人々の風景に対する思いを明らかにしていくことが必要である。景観法の地域的適用においても、住民やNPO等の参画を含めた人々の参加による景観形成の推進への期待が示されている。

そこで本稿では、丹沢大山地域の風景づくりについての課題を明らかにするために、丹沢大山の山岳山麓の眺望に焦点を絞り、日常生活の中でその風景を眺め暮らす人々のその風景に対する思いを明らかとする。また、その前段として、丹沢大山地域における小学校校歌の歌詞分析より、地域の人達に親しまれてきた丹沢大山の山岳山麓風景の文学的解釈を試みた。

校歌は、学校各々が持つ歴史や教育理念がもろこまれ、在校生や教職員が行事の際に歌われる。歌詞には、学校周辺や地域の自然、地理、風土、具体的な地名、学校の校訓や標語、児童・生徒・学生や教職員の雰囲気や理想、社会や未来への貢献、学校名などがよまれることが多い。本稿では、その校歌の歌詞の中から丹沢大山の風景描写を読み解くものである。

2. 校歌にみる丹沢大山地域の風景

(1) 方法

丹沢大山地域内 8 市町村 68 校の小学校を対象に、校歌を収集し、入力シートに、小学校名称や作詞・作曲者、制定年月日、歌詞の中に何をうたっているかを入力した。そして、センテンスごとの分類、組み合わせなどから、丹沢大山地域の山岳山麓風景の構成を分析した。

作詞者は小島喜一が 15 校で最も多くの作詞を手がけていた。ついで、勝承夫 (6 校)、小林純一 (4 校)、和田傳 (3 校)、学校制定委員会 (3 校)、吉田 拓 (3 校)、米山正夫 (3 校) と次ぐ。校歌制定年は、学校の開設に伴ってつくられるが、昭和 41 年、46 年が頂点となっている。

(2) 大分類での校歌歌詞の抽出

8 市町村 68 校の校歌歌詞をセンテンス単位で文意を読み取りながらみていくと 530 センテンスあった。そして、丹沢大山地域の風景をよんでいるものは、145 センテンス (27.4%) であった。そこで、丹沢大山地域の風景をよんでいるこの 145 センテンスの分類をおこなった。

分類は大分類と小分類の 2 段階で分類した (1 センテンスのなかに大分類となる一般名詞が 2 つ以上出現することもあり、分類には重なりがある)。

「山」に関しての歌詞が最も多く 81 センテンス、次いで「川」に関しての歌詞が 38 センテンスであり (表 1)、丹沢大山地域の校歌での山の存在は大きい。

表 1. 校歌歌詞の抽出結果

「山」に関して	81センテンス
「川」に関して	38センテンス
「緑」に関して	25センテンス
「丘」に関して	23センテンス
「故郷」に関して	13センテンス
「海」に関して	12センテンス
「水」に関して	10センテンス
計	202センテンス

表 2. 構成要素の組み合わせ

	山	川	緑	丘	故郷	海	水	合計
センテンス	81	38	25	23	13	12	10	202
	山	川	緑	丘	故郷	海	水	合計
山		3	12	4	8	1	0	28
川	3		3	2	1	7	10	26
緑	12	3		2	5	0	3	25
丘	4	2	2		3	2	0	13
故郷	8	1	5	3		0	0	17
海	1	7	0	2	0		2	12
水	0	10	3	0	0	2		15

1) 日本大学大学院生物資源科学研究科生物環境科学専攻 2) 日本大学生物資源科学部生物環境工学科

(3) 構成要素の組み合わせ分析

風景要素の組み合わせを分析すると、最も多い組み合わせは、「山と緑」12、「川と水」10、「山と故郷」8、「川と海」7 センテンスであり、一定のセット性のある風景が歌詞によまれていることがよみとれた。また、各組み合わせのある小学校の市町村別は以下である。

「山」と「緑」12：厚木市・秦野市・松田町・清川村・津久井町・山北町・愛川町

「川」と「水」10：厚木市・秦野市・松田町・伊勢原市・津久井町・山北町・愛川町

「山」と「故郷」8：厚木市・清川村・山北町

「川」と「海」7：厚木市・秦野市

(4) 詠われている箇所

「山」に関する分類は、全 96 センテンス中、「大山」20、「丹沢」18、「阿夫利」14、「特定できぬ山」14、「富士山」11、「ふるさとの山」7 とつづく（図 3）。

「川」に関する分類は、全 40 センテンス中、「相模川」12、「中津川」8、「玉川」3、「道志川」3、「特定できぬ川」3 とつづく（図 4）。

丹沢大山に関する風景をよんでいる 145 センテンス中 81 センテンス（55.9%）が山に関するものであり、校歌の中における山のシンボル性の高さが明らかになった。

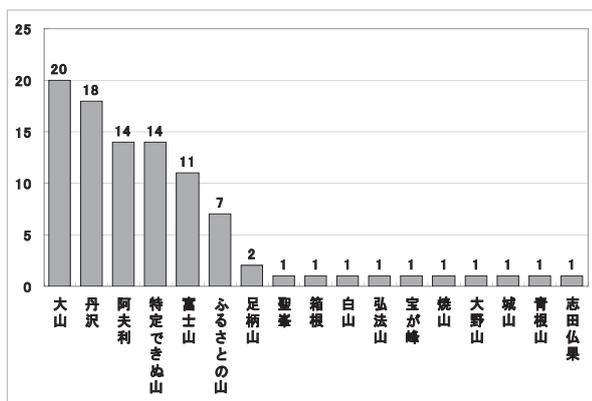


図 1. 山に関する歌詞抽出

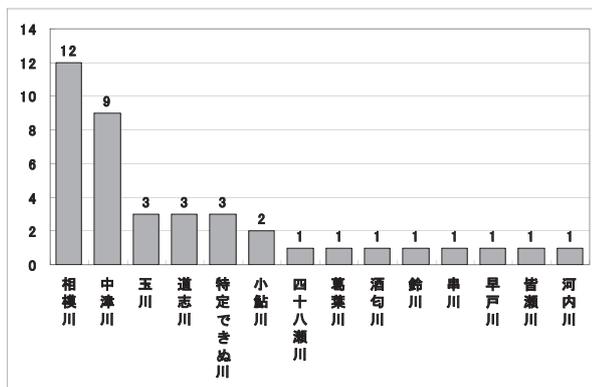


図 2. 川に関する歌詞抽出

3. 小学校校歌にみる丹沢大山地域の山岳山麓風景構成

1 センテンスの中にも固有名詞が 2 つ以上出現することもあり、小分類でのサンプル数にも重なりはあるものの、山に関する風景構成では、「大山」、「阿夫利」、「丹沢」、「富士山」がおおくよまれ、大山から丹沢へ、丹沢から富士山へというビュー視点の変化に伴う山岳風景をうたっているものと、各山々を歌詞にあげているものであった。

川に関する風景構成では、「相模川」、「中津川」が多くよまれ、「玉川」、「道志川」が次ぎ、丹沢大山地域を流れ、果てなく海まで流れつづく様子がうかがわれる。

4. 都市住民の丹沢大山地域の山岳山麓風景意識

丹沢大山の風景を眺められると予想される都市部に住む人々を対象としたアンケート調査を実施し、丹沢大山の山岳山麓の風景に関する都市住民の意識を明らかにした。

(1) アンケート回答者の属性・調査方法の概要

調査方法は、丹沢大山の風景を眺められると予想される 7 市（厚木市・川崎市・相模原市・茅ヶ崎市・秦野市・藤沢市・横浜市）の市民を対象とし、丹沢大山の山岳山麓風景をどのように捉えているかのアンケート調査を実施した。対象者の選定は NTT の 2004. 11 ~ 2005. 10 まで有効の電話帳より、無作為抽出により各市 300 人を抽出した。直接郵送・返送の形式をとり、2005 年 10 月 26 日に発送をし、期限は 2005 年 11 月 11 日までとし、回収率等は、表 3 に示すような結果となった。

(2) アンケート回答者の属性

アンケート回答者の男女比は、男 86.8%、女 11.4% であり、男性が 8 割を超えたのは、世帯主に郵送をしたことに起因する。年齢層では、60 代が 35.5% と最も多く、50 代 70 歳以上が 24.8% で並び、40 代 8.3%、30 代 3.7%、20 代 1.1% とつづく。40・50・60 代で 85.2% という結果であった。

職業では、無職が 36.0% で最も多く、会社員 31.1%、自営の商工・サービス業 7.7%、主婦 6.6% とつづく。無職、会社員が多い結果となった。回答者の居住地は、秦野市と藤沢市の市街地・郊外地住民共に多く、横浜市の市街地 4.4%、相模原市の郊外地 3.3%、茅ヶ崎市の郊外地 2.9% と回答者が少なく、地域的な差がある。

回答者を丹沢大山との位置関係で居住地域区分すると、丹沢大山南麓に広がる秦野・厚木市 34.9%（以下：[秦厚]）、丹沢大山を遠望する南東都市部の藤沢・茅ヶ崎市 30.0%（以下：[藤茅]）、北東都市部の相模原市 12.3%（以下：[相模]）、遠く離れて遠望する都市部横浜・川崎市 22.8%（以下：[横川]）であった。以下、この 4 地区別で丹沢大山との位置関係を考慮して分析をする。

市名	郵送数	不届数	実送数	返信数	回収率	分析区分
秦野市	300	5	295	87	29.5%	159
厚木市	300	10	290	72	24.8%	
藤沢市	300	13	287	87	30.3%	137
茅ヶ崎市	300	17	283	50	17.7%	
相模原市	300	29	271	56	20.7%	56
川崎市	300	11	289	49	17.0%	104
横浜市	300	15	285	55	19.3%	
合計	2100	100	2000	456	22.8%	456

表 3. アンケート回収率

(3) 丹沢大山への訪問頻度

全体での丹沢大山への訪問頻度では、数年に1回61.2%、年に2回以上17.3%で、約8割が丹沢大山へ訪れている状況であり、実際に丹沢に訪問している都市住民の回答が多かったといえる。しかし、一方で「行ったことがない・何処にあるか分からない」の回答が16.9%もある。

居住地別での行動頻度では、どの地区においても「数年に1回」が最も多かったが、数年に1回という最多回答に対して、[横川]では、「行ったことがない」25.3%。相模では、「年に2回以上」15.4%、「行ったことがない」13.5%といったばらつきがある。[藤茅]では、「行ったことがない」22.3%、[秦厚]では、「年に2回以上」26.6%という回答で丹沢大山との距離的關係で行動頻度に差がある。

(4) 丹沢大山風景の日常的な可視化度合いの差

丹沢大山の山岳山麓風景が日常的に見えるかどうかという日常的な可視化度合いの質問に対しては、全体では「よく見える」64.0%、「たまに見える」17.3%で、8割が日常的に可視化できるが、不可視状況下との回答も17.3%あった(図3)。

居住地別での日常的な可視化度合いでは、すべての地区において「よく見える」という回答が最多だが、度合いの程度についての回答には差があり、[横川]では「よく見える」33.7%、「たまに見える」29.7%、「以前から見えない」25.7%の3極に分かれる。[秦厚]、[相模]ともに「よく見える」が圧倒的に多く93.7%、73.2%で、[藤茅]では「よく見える」+「たまに見える」が77.6%であり、丹沢大山からの距離と位置関係において、風景の日常的な可視化度合いの差が明らかになった。

(5) 丹沢大山の魅力

丹沢大山の魅力に質問した。「四季の自然の移ろい」66.8%で最も高く、「森林」42.0%、「山並み」38.7%等、視覚的魅力も含めた多様な自然の存在が評価されている。また、「車で入り易い」24.5%、「都心に近い」21.4%などの都市近郊で便利などところにある自然としての魅力が評価されている(図4)。この点は、先の登山者アンケートとも一致しており、丹沢大山の魅力として県民の共通認識があるといえる。

居住地別では、どの地区においても「四季の自然の移ろい」など視覚的魅力が評価されていることに変わりはないが、[横川]では「都心に近い」ことが評価され、有意差があった。[相模]では、「四季の自然の移ろい」に有意差がみられ、

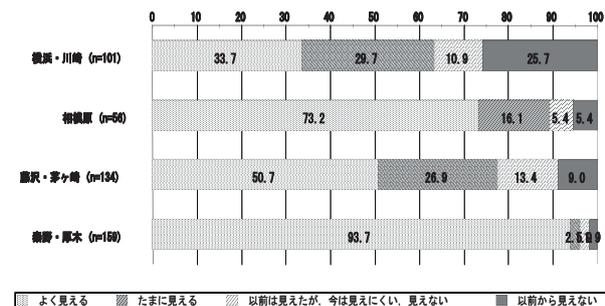


図3. 丹沢大山風景の地区別での日常的な可視化度合い

居住者の丹沢大山との距離、位置関係が影響しているといえる。

(6) 山岳山麓風景の価値

丹沢大山の山岳山麓風景をみることでの価値としては、最も高い価値は「気持ちやすらぐこと」であり、精神的やすらぎの風景として価値があると評価されている(図5)。また、「四季の移り変わりを感じる」で視覚的に季節の変化や時の流れを実感し、「雲のかけ具合や見え方で天気の手がかりがわかる」といった人々の日常的な暮らしやなりわいに密着した風景としての価値も抱かれています。

居住地別に山岳山麓風景の価値評価の相違をみると、すべての地区において「気持ちやすらぐこと」を一番に挙げ、距離に関係なく、丹沢大山の山岳山麓風景は、精神のやすらぎとして共通の精神的価値が高いと評価されている。「雲のかけ具合や見え方で天気の手がかりがわかる」といった日常的な暮らしに密着した風景としての価値は、[横川]・[相模]・[藤茅]ではさほど評価されず、[秦厚]で高く評価され有意差がみられた。丹沢大山の近くで暮らす人々にとっては、丹沢大山の山岳山麓風景が生活の中において身近なもの、実用的なものとして評価されている。

(7) 風景の可視化度合いと丹沢大山保全意識の関係

丹沢大山の環境保全に関する質問では、全体では、「丹沢の森林状況をまずは勉強する」61.1%、「情報を収集し、丹沢の大切さを仲間に伝える」31.7%である。まずは、丹沢大山のいまの現状を把握し、そのことを自分で周囲に知らせることに協力できるといった回答であった。そして、寄付行為やボランティア活動の意識も多少ある。

丹沢大山の風景の日常的な可視化度合いと丹沢大山の



図4. 丹沢大山の魅力

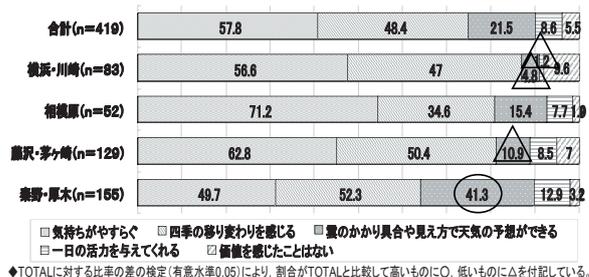


図5. 山岳山麓風景の価値

保全意識の関係をみると、可視化度合いの高い人は、「ボランティアとして森林整備を手伝う」、「情報を収集し丹沢の大切さを仲間に伝える」などの積極的な活動意識が高い傾向にある。また、可視化度合いの低い人は、まずは、「丹沢大山の現状を勉強したり」であり、また、「関心がない」という回答が全回答の約 23% もあり、丹沢大山の風景の日常的な可視化度合いと保全行動意識での差があることが明らかとなった（図 6）。

5. まとめ

(1) 丹沢大山地域の小学校校歌での風景解釈

山が歌詞の中に最も多くとりあげられており、特に、「大山」、「阿夫利」、「丹沢」、「富士山」がおおくよまれ、大山から丹沢へ、丹沢から富士山へという視点の変化に伴う山岳風景をうたっているものと、各山々を歌詞にあげているものがあつた。

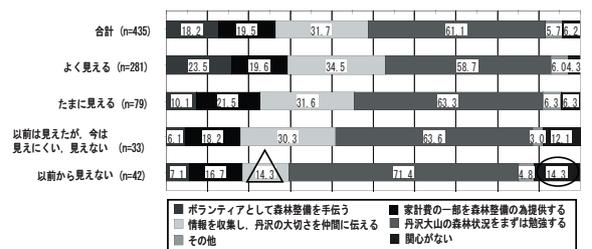
川では、「相模川」、「中津川」がおおくよまれ、「玉川」、「道志川」が次ぎ、丹沢大山地域を流れ、果てなく海まで流れつづく様子がうかがわれる。

(2) 丹沢大山に対する都市住民の風景意識

丹沢大山の風景が可視化できると想定された都市住民へのアンケート結果では、可視化している都市住民からの回答が多く、丹沢大山との距離的關係と風景意識との密接な關係が明らかになった。丹沢大山の魅力としては、「四季の自然の移ろい」、「森林」、「山並み」等の視覚的魅力や都市近郊に近い、多様な自然の存在が評価されている。地域ごとでの特徴としては、横浜市、川崎市の市民では「都心に近いこと」という魅力に他の地区との有意差がみられ、また、相模原市では四季の自然の移ろいに有意差がみられた。

丹沢大山の風景の価値としては、丹沢大山からの距離に關係なく、精神的なやすらぎの風景として評価され、視覚的に季節の変化や時の流れを実感できる風景として高い評価を得ている。また、風景の価値として、山の風景から天気予想という、暮らしに密着した風景の価値は、秦野市、厚木市という丹沢大山地域に近い都市住民で評価が高いという有意差がみられた。

丹沢大山に対する都市住民の保全意識は、丹沢大山に近く、風景の日常的な可視化度合いが高い人ほど積極的な行動意識が高いといえる。可視化度合いが低い人は、まずは現状を知ろうという意識と、関心がないという意識の状況である。丹沢大山の風景に対する日常的な可視化度合いにより、丹沢大山の保全意識に大きな差があり、今後は、その行動意識がある丹沢大山に近接した都市住民を、具体的な保全活動に誘導していく仕組みの開発と、同時に、丹沢大山地域から離れている都市住民に対して、より丹沢大山の現状に關しての情報と、その再生の課題、必要性についての情報発信や、気楽に参加できる環境保全、再生活動を企画していくことが求められている。



◆TOTALに対する比率の差の検定(有意水準0.05)により、割合がTOTALと比較して高いものに○、低いものに△を付記している。

図 6. 風景の可視化度合いと丹沢大山保全意識の關係

謝 辞

この調査研究にあたり御助力をいただきました、神奈川県教育委員会、神奈川県立総合教育センター亀井野庁舎教育相談センター、善行庁舎西棟 2 階カリキュラム開発センター、神奈川県丹沢大山地域内小学校の先生方、神奈川県都市住民のアンケート御協力者、神奈川県自然環境保全センターの方々、ツーリズム・環境教育学習グループメンバーのみなさまに謝意を表します。

文 献

- 杉浦高志・糸長浩司・藤沢直樹, 2006. 都市住民が持つ丹沢大山の山岳山麓風景の評価に關する研究—「丹沢大山総合調査」による地域再生研究プロジェクトその 4—, 2006 年度日本建築学会大会(関東) 学術講演梗概集, E-2, pp.627-628.
- 安田 寛, 1999. 日韓唱歌の源流—すると彼らは新しい歌をうたった—. 224pp. 音楽之友社, 東京.
- 鷹野良宏, 2006. 唱歌教材で迎える国民教育史—ハナハト世代からサイタクラ育ちの憶えた歌—. 269pp. 日本図書刊行会, 東京.
- 浅見雅子・北村眞一, 1996. 校歌—心原風景—. 271pp. 学文社, 東京.
- 校歌こだわり調査隊, 2004. 発掘! 校歌なるほど雑学辞典. 208pp. ヤマハミュージックメディア, 東京.
- 安田 寛, 2003. 「唱歌」という奇跡 十二の物語: 讚美歌と近代化の間で. 201pp. 文藝春秋, 東京.
- 神奈川県丹沢大山地域内 8 市町村(厚木・秦野・松田・清川・伊勢原・津久井・山北・愛川) 68 小学校校歌歌詞.

※本稿は、杉浦高志「山岳山麓地域の風景解釈と風景保全に關する研究—文学作品解釈及び意識分析から—」(2006 年度日本大学大学院生物資源科学研究科博士論文)の第五章「丹沢大山地域の小学校校歌にみる丹沢大山地域の風景構成」、第七章「都市住民がもつ丹沢大山地域の山岳山麓風景保全意識」をもとに、加筆・修正したものである。